山ノ上事件ノ求刑

一瞬傍聽席に不滿のざわめき

山の上事件の公判はいよ〳〵最終段階を迎えるに至つた。事件発生以来ほぼ二年、その間に法廷に立つた証人のみでも七十余名に及び、これら尨大な調書の結論がいま生れようとしている訳である。

錄音による當時の聲

八月二十九日午後一時半から開廷された福岡地裁に於ける公判は、検事の論告求刑が行われると言う緊迫した空気の中に被告の家族や行動隊員、各支部の傍聽者等約三十名がつめかけ、坂本、田中、諫山弁護士を始め、菊川、河野両特別弁護人の顔にも緊張の色がみなぎつていた。

型通りの裁判官による被告尋問の後検事側の要請によりテープコーダーによる山ノ上団交当時の録音を再現、「ピツピ、ワツショイ！「組合代表ガンバレ」　独り行動隊の合唱等指揮者の音頭に従い整然と唱和し行進する組合員や家族の行動が手に取る様に眼に浮び、身動き一つする者もいない。約一時間に亘り二年前の姿をしのんだが、録音終了と同時に検事の氷のような論告が開始された。

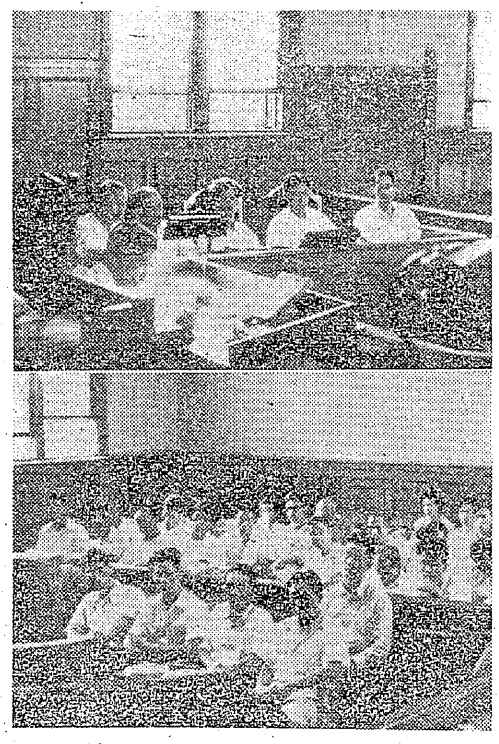
不當な求刑

先づ各人の当日の行動に関し本人の供述並びに証人の供述に基き、住居侵入の事実ありと断定し、つづいて暴行傷害の件に言及したがこの論旨は明らかに事実の歪曲であり拡大解釈であり、被告のあづかり知らない処であるとしか受け取れないものである。

即ち七月二十日付で提出された検事側の「予備的既因及罰条の追加調求書」に見る様に、被告達の暴行容疑が稀薄になるや、「たとえ被告自身が傷害を与えたものでないとしても屋外に居た大衆と共謀して行つたのだから、共犯として傷害の罪はまぬがれない」との論法である。いづれこの論告の内容は明らかにすることが出来るが、このような論旨は断じて吾々も許容することは出来ない。かくて検事はそれぞれ次の求刑を行つた。

山本　豊	懲役	一年
松原愛秋	〃	二年六ケ月
森田　満明	〃	一〇ケ月
古賀　進	〃	一〇ケ月
池田　昭二	〃	一〇ケ月

右記のような論告求刑を受けたが吾々は最後までこれが不当な求刑であることを信じている。今後この求刑に対し九月三十日には弁護団側八名がそれぞれの最終弁論に立ち裁判の公平なる判決を待つ訳であるが、勝立事件と共に全員の無罪を確信して全組合員と家族の関心を呼ぶものである。



上　検事論告に聞き入る辯護團
下　錄音に耳すます被告席の同志

青年部發足（本所）

日井地域分会では組合の本年度行動方針に基いて青年部を八月中に結成することを、公民館の一本化生活革新運動推進と共に三大目標として取上げ、八月上旬より各班一名の準備委員を選出し、七日、十八日と二日にわたり申し合せ（細則）審議、名簿確認、総合対策等討議し、地域分会青年婦人対策部も数回にわたる会議を持ち、八月二十日午後七時三十分より日井保育園で青年部結成総会を開催した。

仮議長に岩下秋男氏、副議長に原田芳信氏を推薦、塚元支部長の挨拶は従来の形式的な殻を破り、労働者の性格、労働者階級の歴史、その役割り、日本における再軍備に反対し、生活と民主的権利を守り闘つている労働組合、特にそのを理論的に説明し、出席者に自信と確信を深めさせた。

「申し合せ」は原案異議なく決定役員選出に移つたが　副部長（女子）一名は後日女子の総会をもつて、幹事八名は各班会議にて選出することゝなり、次の三氏が役員推進体である青年層の使命の重大に選ばれた。

青年部長　前田　義則（宮浦）
副　〃　原田　芳信（本所）
〃　〃　萩尾　哲二（本所）

前田青年部長は今日発足した青年部は労組の三十年度行動方針に基いて組織されたものであり、従来あつた青年部、青行隊の性格とは自ら異り、過去の闘争の成果と缺陷を明らかにし、長所を伸ばし、短所を補い、より幅の広い性格を内外情勢の発展、変化を考えに入れながら話合いの中から作りあげてゆきたい。

と挨拶。「平和を守れ」の合唱で十時過ぎ散会した。

連載漫画 NO31

3ちゃん　中村かめお

勿体なくて喰えぬ

涙を誘う小倉同志の仲間愛

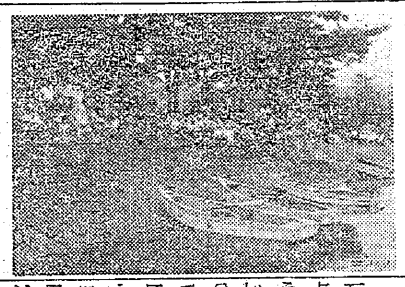
殘暑に汗を流し作業を終えた昼食後の一ときニ十数名の裸体が執行委員の情寛を偲いでいる。

小倉の同志が資金カンパに三池を歩き南社宅で一夜を過ごし、夕食に主婦会で心をこめて出した副食の中、野菜と漬物だけを食べ煮魚には一箸もつけていない。翌朝は味噌汁とたくあんだけを食べ生卵はそのまゝ残つている。資金不払いとロツクアウトに耐え遂く三池まで行脚に廻る人々の今日の活動源にと思つて接待した主婦会員も不思議に思い、何故に食べないのか、魚や卵は嫌いなのかと問えばいや嫌いではないと答え、ではどうして召上らないかとしつこく聞けばやおら答えて曰く「小倉では仲間たちが食うや食わずで頑張つている、私達だけこんなごちそうは勿体ない、米のメシだけでも有難いのに」と聞き入る裸の男たちたりた。

赤田の池で樂しいレクレー

四山の良い子たちが

四山支部福祉第五分会児童部では児童の夏季対策を検討中であつたが、学術向上、保健、家族ぐるみの楽しい行事をと一石三鳥を狙つて赤田の池でレクレーションを行つた。このレクレーションには借切バス三台に分乘して児童、家族学校、会社、組合などよりの来賓や地域分会役員が到着地までの約三十分間を車内で楽しく過した赤田の池の目的地では来賓の挨拶のち直ちにスケツチ大会を行い役員、父兄、来賓も熱心に子供たちに交つて指導に大童となり、微笑ましい風景がみられた。中食後紅白二組に別れ来賓対地域役員、児童の男女対抗の演芸会を催し周囲の風光の美しさと相まつて和やかなうちに午後四時すぎ帰路についた。



【写真は食事中のよい子たち】

盆踊り
港務支部では各地域でスクエヤーダンスの普及に、子供も老人も一緒になつて楽しい夏の宵にリズムに合せて踊つてきたが、このスクエヤーダンスを盛込んだ盆踊りが各地域で披露され好評を受けた。

署名運動へ

或る日傷害事件を引きおこした若者の欲願署名運動が起つたまゝ〳〵若者の居住していた社宅でこの署名状が廻されると忽ちの中に数百名の欲願署名運判状が出来上つた。処がこの回状は昼間まわされたので殆んどのその家の主人はこの事を知らず大部分の署名が主婦達の手に依つて成された。ところが主婦達は、この署名運動の発起人も知らなければ、如何なる経路を通つてこれが一戸に廻されたかも知らず、又事件そのものが欲願に値するかどうか等は、てんで考えてもみなかつたと云う様な具合で、判も捺印してあるし近所手前もあるので家もおしときましよう。はい〳〵方で……

『何さん！署名運動ですよ』『はーい、署名運動　わさ〳〵持つてきて下さらんでも貴方の方で書いておいて下さるといゝのに、まあ〳〵。はいどうも』と云うに至つては、もうあきれて言葉も云えない。

署名と云うものが如何に重要なものであるか？

ただ書きさえすればそれで事は済むんだ等と考えるのは大変な間違いです。その事が成就するまでは、その責任の一端を署名者各人が夫々分担しているのです。

故に署名する時はその事に対して十二分の考慮を加える事が必要です。そして後に明確な態度を決める事です。こんなわかりきつたことがなか〳〵実行され難いものです。

もし組織を持つた団体等にこの様な盲目的な署名が成されでもすると、これが悪用された時を思うと実に寒然たるものがあります。

もし今後三池の主婦会に於て署名運動がなされる時には、その名に恥かぬ立派な署名運動を成して、その範を他に画れたいものです。

三鉱主婦会の皆様
（三川　高田）

企闘一周年の決起大會

港務支部雑貨倉庫出来高分会と貯炭出来高分会では、八月三十一日午後四時から荷役関雑貨係で合同の企闘終結二周年記念決起大会を行つた。

思い出深い独立行動隊の歌を声高らかに歌ううちに職長の選出を行つた。分会長の挨拶、ついで職場代表者の力強い経過報告と今後なお一層組合運動の推進力となつて闘うとの宣言が行われた。

支部執行部からもとの大会を祝して檄が贈られた。大会はこの両分会の宣言文を万場一致可決。最後に全労働者の方才を三唱して夕闇せまる波止場で意義深い大会の幕をとじた。

七面山へ慰安旅行

三川外来三地域分会が

石炭鉱業合理化法案に便乗した独占資本の三井では、長期計画と云う第二の首切りを行なおうとしているとき、外来三区では他の地域分会にくらべ活動の不活発を今まで批判されて来たが、待鳥新分会長が就任するやこの汚名を返上しようと、組織強化や主婦会の育成に骨にむち打ち活動した結果立派な地域分会に盛り上げる事が出来た。このため分会長をはじめ各役員の並々ならぬ努力に感謝するため、同分会では組織の再整備と長期計画粉砕に万全を期する慰労を作るため、去る廿八日家族同伴約一五〇名がバス三台に分乗し七面山に慰安旅行を行つた。七面山で総会を開催、現在迄の行動を反省し、新たな活動方針を検討した。また老人には神経痛に良く効くといわれる滝を案内する等時期計画に対してかも知れない。

創作　白花（終）

永田光次作
久慈悠一画

すべてを浩吉の寝腕に託しきつたやすらかな寝顔。母子の呼吸音が殺風景な室内に流れ、浩吉の鼾覚に空しく響く。外は依然として北風が音をたてて吹きまくつている。表の硝子戸が時折、ガタ〳〵と大きな音をたて眠ろうとする浩吉の神経をいらだたせた。やがて永いもの想いから敏子の眠息のなかに引き入れられていつた。

先日の暖、日を最後に本格的な寒さがやつて来た。冷い寒風が容さに固く鎖されている。浩吉は笑顔で迎える敏子にオーバーを渡し身を縮めて真赤に燃えた七輪に掌をかざした。

「あ、オーバー…、お母ちやん」すぐ見つけた涼子が駆るようにオーバーに飛びついた。

敏子が嬉しそうに一。

「涙ちやん着て見んね」敏子の掌が動き、ペサ〳〵と云う音とともに真紅のオーバーが現れた。

「わあー、赤かつ」涼子の躍んだ声が室内一杯ひーんと響いた。赤いオーバーを着て全身嬉しさにあふれた涼子を見ているうち、浩吉は自づから喜びの微笑が漏れつた「敏子、後二日すつと正月ばいね」夕食の膳に乗つた浩吉がほのかに立昇る御飯の湯気を顧一杯に受けながらしんみりと云つた。

「ほんにすぐですね。涙ちやんお年幾つになつとね」

「うち八つよ」涼子がませた口調で云つた。

「誠也ちやんお年幾つ？」浩吉が小さい男の子に聞いた。

「セーイヤオトチナイ」御飯を口一杯ほおばつてあどけない口調に笑つた浩吉がほのかに立昇る御飯の湯気を顧一杯に受けながらしんみりと云つた。

「ほんにすぐですね。涙ちやんお年幾つになつとね」

「うち八つよ」涼子がませた口調で云つた。

「誠也ちやんお年幾つ？」浩吉が小さい男の子に聞いた。

「セーイヤオトチナイ」御飯を口一杯ほおばつてあどけない口調に笑つた。皆の笑声が押迫つた歳末の夜空に流れ、わびしさのなかに小さい幸福が潜うた。

放なく頭を刺す。道行く人々は寒さのなかに小さい幸福が潜うた。

そうにオーバーの衿を深く立て目前に迫つた正月の準備に慌しく往来している。何処かで餅搗音が正月の近さを切実に感じさせる。浩吉はオーバーなしで寒さに堪えながら家へ急いでいた。その腕には長女の赤いオーバーがしつかり抱かれていた。昨日三千八百円也のボーナスをもらつたのである。早速長女のオーバーを買いに行つたのであつた。社宅の各家の戸は寒

お願い

タブロイド紙もはや数回を発行しましたが、本紙に対する希望や意見をどしどし御投稿下さい。